



Title	香山陽坪『砂漠と草原の遺宝 -中央アジアの文化と歴史-』東京：講談社（講談社学術文庫），2021年，209頁
Author(s)	小沼，孝博
Citation	日本中央アジア学会報，19，84-85
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.84
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94164
Type	journal article
File Information	JB19_017onuma.pdf



香山陽坪『砂漠と草原の遺宝——中央アジアの文化と歴史——』

東京：講談社（講談社学術文庫）、2021年、209頁

小沼 孝博

1963年12月初版発行の名著が、約60年の時を経て装い新たに復刊された。本書は、1930～50年代に実施されたソ連の考古学調査によって得られた資料をもとに、執筆当時は得がたかった著者自身の中央アジア訪問の見聞を交えながら、「アラビア人征服以前」の中央アジア文化史を活写したものである。

序論にあたる「失われた文化を求めて」では、西トルキスタンが手つかずのままであった、初版発行時の日本の中央アジア史研究の偏りを批判し、ソ連の考古学的研究の成果を取り入れる必要性を主張する。「農耕と牧畜のはじまり」では、前半でコペト・タグ北麓の農耕遺跡から中央アジアにおける農耕文化の成立を論じ、後半ではカザフ草原におけるアンドロノヴォ文化の展開から初期遊牧民の発生までを扱う。「バルティア皇帝の宮殿」では、中央アジアにおける国家（都市国家）の発生を検討するが、その萌芽の二大要素として、都市型集落の出現だけでなく、灌漑網の発達を挙げるのが特徴的である。具体的には、アケメネス朝、アレクサンドロスの侵入、セレウコス朝、バクトリア王国という外来者の政権の支配を経て、「中央アジア人の国家」たるバルティア帝国の成立に及ぶ。「西域の国々」では、紀元前後の時期のバクトリア（トハリストン）北部、フェルガナ、ソグディアナの古代遺跡から、都市や文化の形態を論じる。「草原の民、高原の民」では、先ず塞・烏孫・突厥が残した墳墓から遊牧民の古代文化の一端を窺い、続いてソグド人のセミレチエへの進出と殖民、そこで被った遊牧文化の影響が、クラスナヤ・レーチカやアク・ベシムの遺跡を事例に説明される。「城塞と都市」では、ヴァラフシャ、ピャンジケント、バラルイク・テペなどの壁画から、6～7世紀の中世都市の支配者の暮らしや信仰にせまる。終章「オアシスの夕映え」は、8世紀のアラビア人による征服以降、サーマーン朝からティムール朝までの主要建築が足早に紹介される。巻末に附された林俊雄氏の「解説」では、復刊までの歳月で生じた地名の変化、内容の補足、新旧の学説の比較などが示される。

本書の醍醐味は豊富な考古学資料にもとづく具体的な叙述であり、なお色あせない読み応えを保っている所以となっている。同時に1930～50年代の中央アジア考古学調査の足跡が

たどれるようになっており、貴重な遺産の数々が、いつ、だれによって、どのように発見・研究されたかも通観できる。むろん、約 60 年前の著作ゆえ、“古さ”を感じさせる部分(唯物史観に準じた見解、アク・ベシム遺跡の比定など)はあるものの、その一方で「遊牧民と定住民のからみあい、これが中央アジアの歴史の大きな特色である」(13 頁)、「東西文化交流の面のみ強調され、中央アジア独自の歴史と文化はほとんど無視されていた」(13 頁)、「遊牧民や遊牧地帯を、ただ遊牧一色にぬりつぶすのは誤りで、ある程度の定住生活をそこに考えねばならない」(92 頁)、「人間の努力によって肥沃の土地がつくり出されたが、また反対に人間の行為によって砂漠にもなった」(159 頁)等々、初版刊行後に日本の中央アジア史研究が歩んだ足跡を思えば、著者の先見と卓識に驚かされる指摘が随所に見られる。

著者が「あとがき」で述べるように、初版発行時は、「西トルキスタン史についてとくに書かれた日本語の書物はほとんどない」(179 頁)時代である。読了後、その平易な筆致とは裏腹に、著者の学究心における“凄み”を感じずにはいられなかった。また同時に、学生が気軽に手に取れる入門書に欠ける現状に鑑み、本書に続いて中央アジア史関連の一般書の復刊がなされてもよいのでは、と思い及んだ。佐口透『ロシアとアジア草原』(吉川弘文館、1966)、前嶋信次『シルクロードの秘密国——ブハラ——』(芙蓉書房、1972)、護雅夫『古代遊牧帝国』(中央公論新社 [中公新書]、1976)、間野英二『中央アジアの歴史』(講談社 [講談社現代新書]、1977) などはどうであろうか。シリーズ化に期待したい。

(東北学院大学文学部)